

福島敏夫随筆集『乙戸南雑話「花鳥風月および星・虹

を愛でながら」

主宰論説 54

3つの湖および沼群：十和田湖、野尻湖、五色沼

日本で、3大湖として知られるのは、琵琶湖、霞ヶ浦、サロマ湖だと思われる。しかし、ここで取り扱うのは、私の半生において深い関わりがあった3つの湖と沼群であり、それらを取りあげて、その景勝、それに関わる逸話、名所・旧跡として訪れた思い出話について、まとめておきたいと思い、ここに記すものである。

1) 十和田湖:

十和田湖（とわだこ）は、青森県十和田市と秋田県鹿角郡小坂町にまたがるカルデラ湖であり、面積は日本の湖沼では12番目である。二重式陥没カルデラ湖で南部の御倉半島（おぐらはんとう）と中山半島に挟まれた中湖（なかのうみ）と呼ばれる水域に最深部があり、最大水深は326.8 mで、日本の湖沼では第3位である。この湖から唯一流出する奥入瀬川が、湖東岸より北東方向に太平洋に向かって流れ、湖から約14 kmにわたる奥入瀬溪流となっている。十和田湖は十和田火山として、約20 km北の火山群である八甲田山ともども防災行政の監視対象になっている（ウィキペディア日本語版）。

大学教養時代、同級生5人で、八幡平を訪れた際、その一環として、十和田湖を遊覧するとともに、奥入瀬の溪流を、楽しんだ。今も、当時の同級生仲間の姿とともに、十和田湖の景観と奥入瀬の清流の情景が、臉に浮かぶようである。

2) 野尻湖:

野尻湖（のじりこ）は、長野県上水内郡信濃町にある湖である。古くは、信濃尻湖（しなのじりこ）とも、芙蓉湖（ふようこ）とも呼ばれる。ナウマンゾウ化石や旧石器時代の遺物が出土する湖としても知られており（野尻湖遺跡群）、発掘調査が行われている。湖沼水質保全特別措置法指定湖沼の天然湖で、妙高高原、黒姫高原とともに妙高戸隠連山国立公園に指定されている。東の斑尾山と西の黒姫山に挟まれた標高654メートルの高原に位置する。面積は4.56平方キロメートルで、長野県の天然湖としては諏訪湖に次いで2番目に大きい。水深は39.1メートル（2017年4月調査）あり、貯水量では諏訪湖を上回る。湖の水は池尻川を通じて流出し、関川へ合流して日本海に注ぐ。（ウィキペディア日本語版）。

昔、学部3年頃、物理化学関係の研究室に配属されたとき、同じ研究室仲間の一人の招待で、野尻湖の湖畔の別荘に招かれて、2～3日を過ごしたことがある。夏だったので、野尻湖で、水泳も楽しみ、庭先での卓球もやって、下記のような下手な和歌をしたためた思い出がある。もう、60年ぐらい前のことだから、今は、別荘群の町並も、湖周辺の景観も、すっかり変わってしまっていると思うが、その研究室仲間と当時の風景が、偲ばれる。

下手な和歌一首：

湖の水面遠くうっすらと孤舟佇む夏の夕暮れ

3) 五色沼

五色沼（ごしきぬま）は、磐梯山の北側、裏磐梯と呼ばれる地域にある大小30余りの小湖沼群のことである。緑・赤・青など、様々な色の沼が点在し、磐梯朝日国立公園に指定されている。1888年（明治21年）、磐梯山が噴火して山体の北側の小磐梯が山体崩壊を起こし、岩屑なだれが川をせき止め、数百の湖沼が形成された。大きいものに秋元湖、小野川湖、桧原湖があり、それらに挟まれるように位置する数十の湖沼群や地域が五色沼と呼ばれる。流入している火山性の水質の影響や、植物・藻などにより、湖沼群は緑、赤、青などの様々な色彩を見せることが名称の由来である。山体崩壊の土砂・岩によって荒れた地域を再生させようと、遠藤現夢が私財を叩いて植林を始めたのがきっかけで五色

沼の観光地化が始まった。現在では五色沼には散策路が整備され、宿泊施設が集まるなど、観光地として発展している。(ウィペデキア日本語版)

この五色沼には、何度か訪れている。まず、日本物理学会の大会後の旅行として、当時の大学院の指導教授らとともに訪れている。また、旧建設省建築研究所の旅行会の際、火山記念博物館見学とともに、訪れた。瑠璃沼、毘沙門沼などの沼の色が、鮮やかな印象として思い出される。このときは、上の方にある桧原湖の遊覧及び湖畔巡りと連動していたという記憶がある。いずれにせよ、この五色沼の湖畔の散策は、自然の造形の妙味と美形を感じる良き場所と考えられる。